

カンキツかいよう病における銅剤の発芽前混用散布の検討

かいよう病の防除には、発芽前・開花前・落弁直後における3回の銅剤散布の効果が高い。
しかし、春季の高温で発芽が早くなった場合、マシン油乳剤と銅剤の散布間隔（14日間）を確保した発芽前防除が困難になることがある。
そこで、銅剤とマシン油乳剤（97%）60倍の発芽前混用散布による省力防除について検討した。

■ かいよう病

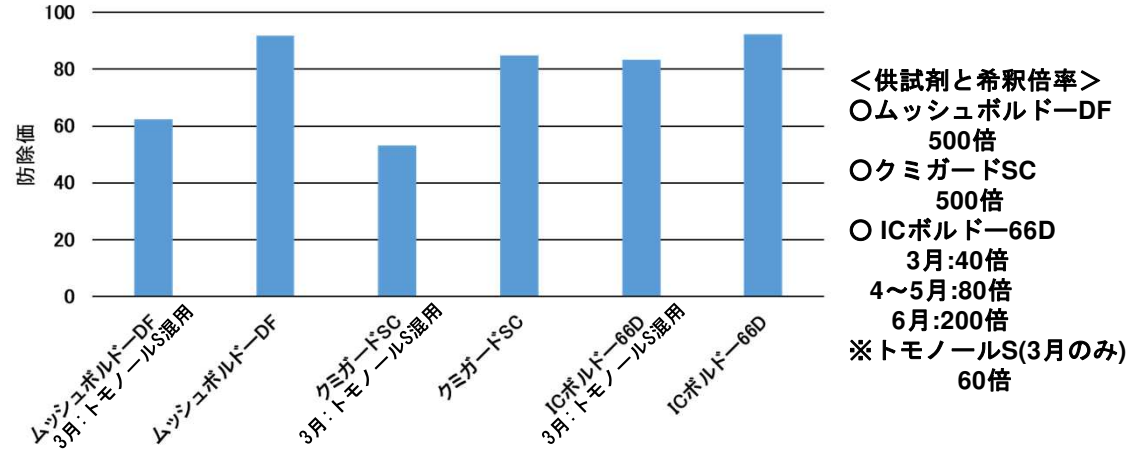
- 葉、枝梢、果実で発生し、病斑の中心部はコルク化
- 病斑からは病原細菌が流出し、周囲に伝染
- 愛媛果試第28号（紅まどんな）、甘平などは本病に弱い



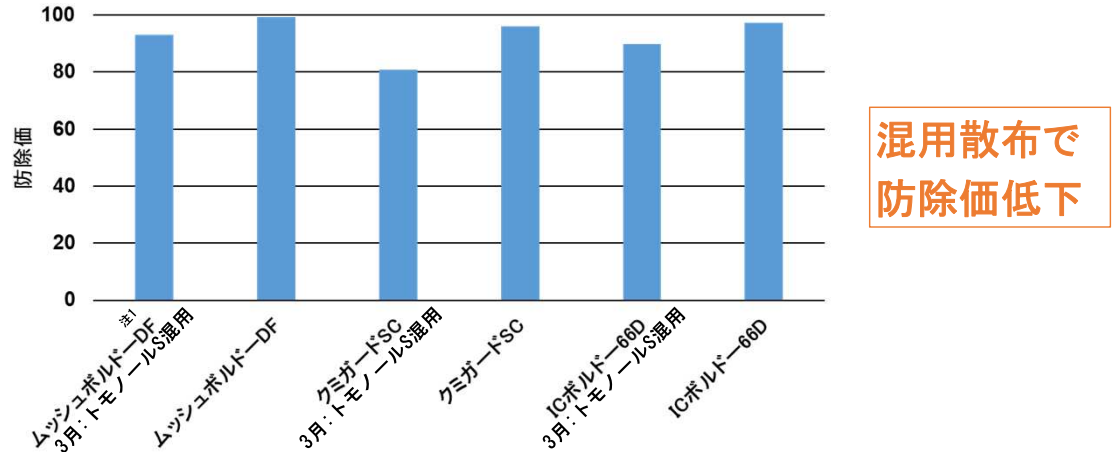
■ 試験概要

- 供試品種：愛媛果試第28号（5年生） 1区1樹3反復
- 接種：2024年3月18日 20葉/樹（2か所/葉）
- 散布：2024年3月22日、4月25日、5月22日、6月17日
- 5月以降はICボルドー66D区以外はアプロン200倍を加用
- 4月と5月のICボルドー66D区はアビオンE 1,000倍を加用
- 調査日：春葉 7月6日、果実と葉害 7月23日
- 調査方法：1樹当たり春葉200葉、果実50果または全果
- 防除価 = $100 - \{(\text{処理区発病度} / \text{無処理区発病度}) \times 100\}$
※数値が大きい方が防除効果が高い

■ 春葉での防除効果



■ 果実での防除効果



注1：ムッシュボルドーDF+3月トモノールS混用区は、果実数の極端に少ない樹を除外して2反復

- マシン油乳剤（97%）60倍と銅剤の混用散布では、春葉及び果実での防除価は単用に比べて低かった（果実では春葉に比べ影響は小さい）。
- 果実での黒点症状（薬害+黒点病）の発生は、無処理区に比べ少なかったことから、薬害は無かったと考えられた（データ略）。
- 今後は、混用するマシン油乳剤の種類や混用散布が防除効果に及ぼす影響について、さらに調査する予定。